

[B年] 待降節第3主日(2021年12月12日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 40章1～11節**

- 1 慰めよ、わたしの民を慰めよと
あなたたちの神は言われる。
- 2 エルサレムの心に語りかけ
彼女に呼びかけよ
苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。
罪のすべてに倍する報いを
主の御手から受けた、と。
- 3 呼びかける声がある。
主のために、荒れ野に道を備え
わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。
- 4 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。
険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。
- 5 主の栄光がこうして現れるのを
肉なる者は共に見る。
主の口がこう宣言される。
- 6 呼びかけよ、と声は言う。
わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。
肉なる者は皆、草に等しい。
永らえても、すべては野の花のようなもの。
- 7 草は枯れ、花はしぼむ。
主の風が吹きつけたのだ。
この民は草に等しい。
- 8 草は枯れ、花はしぼむが
わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。
- 9 高い山に登れ
良い知らせをシオンに伝える者よ。
力を振るって声をあげよ
良い知らせをエルサレムに伝える者よ。
声をあげよ、恐れるな
ユダの町々に告げよ。
見よ、あなたたちの神
- 10 見よ、主なる神。
彼は力を帯びて来られ
御腕をもって統治される。
見よ、主のかち得られたものは御もとに従い
主の働きの実りは御前を進む。
- 11 主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め
小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。

【使徒書日課】 ペトロの手紙二 3章8～14節

⁸愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。⁹ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。¹⁰主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。¹¹このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。¹²神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。¹³しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。¹⁴だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい。

【福音書日課】 マルコによる福音書 1章1～8節

1神の子イエス・キリストの福音の初め。²預言者イザヤの書にこう書いてある。
「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。」

3 荒れ野で叫ぶ者の声がする。
『主の道を整え、
その道筋をまっすぐにせよ。』」

そのとおり、⁴洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。⁵ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。⁶ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。⁷彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。⁸わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 40章1～11節

- 1 「慰めよ、慰めよ、私の民を」
と、あなたがたの神は言われる。
- 2 「エルサレムに優しく語りかけ
これに呼びかけよ。
その苦役の時は満ち、
その過ちは償われた。
そのすべての罪に倍するものを
主の手から受けた」と。
- 3 呼びかける声とする。
「荒れ野に主の道を備えよ。
私たちの神のために
荒れ地に大路をまっすぐに通せ。」
- 4 谷はすべて高くされ、山と丘はみな低くなり
起伏のある地は平らに、険しい地は平地となれ。
- 5 こうして主の栄光が現れ
すべての肉なる者は共に見る。
主の口が語られたのである。
- 6 「呼びかけよ」と言う声とする。
私は言った。
「何と呼びかけたらよいでしょうか。」
すべての肉なる者は草
その栄えはみな野の花のようだ。
- 7 草は枯れ、花はしぼむ。
主の風がその上に吹いたからだ。
まさしくこの民は草だ。
- 8 草は枯れ、花はしぼむ。
しかし、私たちの神の言葉はとこしえに立つ。」
- 9 高い山に登れ
シオンに良い知らせを伝える者よ。
力の限り声を上げよ
エルサレムに良い知らせを伝える者よ。
声を上げよ、恐れるな。
ユダの各地の町に言え。
「見よ、あなたがたの神を。」
- 10 見よ、主なる神は力を帯びて来られ
御腕によって統治される。
見よ、その報いは主と共にあり
その報酬は御前にある。
- 11 主は羊飼いのようにその群れを養い、
その腕に小羊を集めて、懐に抱き
乳を飲ませる羊を導く。

ペトロの手紙二 3章8～14節

8愛する人たち、この一事を忘れてはなりません。
主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日
のようです。9ある人たちは遅いと思っていますが、
主は約束を遅らせているわけではありません。一人
も減びないで、すべての人が悔い改めるように望
み、あなたがたのために忍耐しておられるのです。
10しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。そ
の日、天は激しい音をたてて消えうせ、自然界の
諸要素は焼け崩れ、地とそこで造り出されたもの
も焼けてしまいます。11このように、これらのもの
がみな、崩れ去るのだとすれば、あなたがたはど
れほど聖なる敬虔な生活を送らなければならない
ことでしょう。12神の日の来るのを待ち望み、それ
が来るのを早めなさい。その日、天は燃え尽き、
自然界の諸要素は火で熔け去ってしまいます。13
しかし、私たちは、神の約束に従って、義の宿る
新しい天と新しい地とを待ち望んでいます。

14それゆえ、愛する人たち、これらのことを待ち
望みながら、染みも傷もなく、平和に過ごしてい
ると神に認めていただけるように励みなさい。

マルコによる福音書 1章1～8節

- 1神の子イエス・キリストの福音の初め。
2預言者イザヤの書にこう書いてある。
「見よ、私はあなたより先に使者を遣わす。
彼はあなたの道を整える。」
- 3 荒れ野で叫ぶ者の声とする。
『主の道を備えよ
その道筋をまっすぐにせよ。』」
そのとおり、4洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪
の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝
えた。5そこで、ユダヤの全地方とエルサレムの全
住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨ
ルダン川で彼から洗礼を受けた。6ヨハネは、らく
だの毛衣を着、腰に革の帯を締め、ばったと野蜜
を食べていた。7彼はこう宣べ伝えた。「私よりも
力のある方が、後から来られる。私は、かがんで
その方の履物のひもを解く値打ちもない。8私は水
であなたがたに洗礼を授けたが、その方は聖霊で
洗礼をお授けになる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・12月12日「待降節第3主日」の日課主題は「先駆者」。「待降節」中に、主イエスの先駆者として「洗礼者ヨハネ」を取り上げることが古くからの伝統となっており、二週(第2主日および第3主日)にわたって扱う聖書日課表の例もある。各福音書は、主イエスの公生涯に先立って活動していた洗礼者ヨハネについて必須事項として伝えており、洗礼者ヨハネから主イエスが洗礼を受けられたという事実以上に両者に史実上の結びつきがあったことが示唆される。実際、「ヨハネ福音書」は、主イエスの最初の弟子たちの多くが元は洗礼者ヨハネの弟子たちであったことを明言しているし、「マタイ福音書」は、主イエスの宣教の最初の言葉が洗礼者ヨハネの宣教の言葉とまったく同じであったと、敢えて描いている。また、「ルカ福音書」は、主イエスの降誕物語を「洗礼者ヨハネの降誕物語」と同時並行で描き、両者の両親が親戚同然の関係にあったと印象づけている(ただし、主イエスの両親はユダ族、ヨハネの両親はレビ族の出自なので、両者が血縁関係にあったとは言えない。古い伝承では、マリアが孤児となってザカリア・エリサベト夫妻のもとで育てられたことから、親戚同然の関係を持つようになったと言われている)。

・旧約日課は、「イザヤ書」から、「主の到来」を告げる宣教者が遣わされることを預言する箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙二」から、「主の日」の到来をどこまでも待つべきことを教える箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、洗礼者ヨハネを紹介する箇所。

・「待降節第3主日」は、伝統的に「喜び(ガウデテ)の主日」また「薔薇の日曜日(ローズ・サンデー)」と呼ばれてきた。待降節中に、来るべき「主の到来」を「喜び」をもって迎えることが確かめられてきた。「薔薇」は、「喜び」を象徴する色を示している。

旧約日課(イザヤ 40 章より)

・「イザヤ書」は、三大預言書の一つで、ヘブライ語正典中「後の預言者」の第一巻として置かれ、正典「預言者(前および後)」全体を結びつける要の位置づけを与えられている。39章までは歴史的な「預言者イザヤ」に直接結びつく預言集と預言活動の叙述で構成され、40章以下は「預言者イザヤ」から150年ほど後の「バビロン捕囚」時代以降に「イザヤの伝統を継承する預言者集団」によって語られ付加された預言集として構成されており、前者を「第一イザヤ」、後者を「第二イザヤ」と呼ぶことが習慣となっている。日課箇所は、「第二イザヤ」の冒頭部分である。

・日課箇所から始まる「第二イザヤ」には、王国滅亡とバビロン捕囚の経験から来る人々の躊躇や疑念の感情を踏まえた預言が多くみられる。それはまた、預言を語る者の置かれた立場がより複雑で困難な状態にあることを意味し、預言書全体の焦点が、「神と民」に

留まらず、「神と民、および両者を結びつける預言者」へと向かうものであることを意味する。この焦点への傾倒は、「第一イザヤ」に比して「第二イザヤ」が格段に強めているところである。

・日課箇所中、3節は新約共観福音書が共通して「洗礼者ヨハネ」の紹介記事の中で引用している句で、「ルカ福音書」はさらに4節を加えて引用している。共観福音書が依拠している「イエス伝承」は、ここに「洗礼者ヨハネ」の姿を見ることから始めて、42章以降で現れる「主の僕(苦難の僕)」に「主イエス」の姿を重ね合わせるなど、「第二イザヤ」を下敷きにして物語られていたことが推察される。

使徒書日課(Ⅱペトロ 3 章より)

・「ペトロの手紙二」は、「手紙一」と共に、「使徒ペトロ」の名によって著された書簡であるが、「手紙一」が宛先教会を明示しているのに対して(Ⅰペト 1:1)、「手紙二」はそれを明示しておらず、書簡形式を取って回覧を目的にした「公開説教」として著されたと考えられる。本書簡は、教会史上、他の新約文書と同等の「正典」として認められまでに長い年月を要しており、4世紀ごろまではペトロの真筆性を認めない立場が優勢であったが、ローマ帝国で国教化されていく過程で正典としては認める立場が取られていった。東方教会で公式に正典として扱われるようになったのは7世紀末以降である。本書簡は、「手紙一」を踏まえた記述(1:5~7)や、「パウロ書簡」に関する言及(3:15~16)が見られるほか、「ユダの手紙」と内容上の共通性(2章)が指摘される。

・本書簡は、キリストの再臨する「主の日」の訪れが当初の見込みに比して大幅に遅れていることに対して、一部の者たちがこれを否定して、そのような神学的期待感を蔑視する立場を取り始めていたことに対して、なお「主の日」の再臨として語られる神学的希望に立つべきことを強く勧め、励ます内容となっている。それは、すでに諸教会内で正典として確立し始めていた新約諸文書の解釈を状況に応じて修正してみせることでもあったと考えられる。日課箇所「主の日」を黙示的終末観に基づいて描写することは、初期の新約諸文書と共通するが、著者は、必ずしもこれを切迫感をもって記しているわけではなく、模範解答的に記述し、そのことによって示されている本質の意味を読みとらせることに留意しながら叙述していると考えられる。「一日は千年のよう…」などの表現は、ある意味ではどのようにも解釈しうるものであり、必ずしも説得力があるとは言えないが、むしろそうすることによって、読者の視点を「終末」そのものではなく「現在」に向けさせているとも考えられる。

・ところで、切迫した終末の到来に対する現実感は、ごく初期の教会に留まらず、外部からの迫害に晒されることによって繰り返し再燃したとも考えられる。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、「洗礼者ヨハネの紹介」記事の箇所、続く「主イエスの洗礼」の記事まで含めて、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で比較的良好に保存された、「イエス伝承」の冒頭を構成する物語となっている。「ヨハネ福音書」も基本構造を共有しているが、多くの点で独自の視点から構成を変更している点がある。

・1 節は、本書(マルコ福音書)のタイトルとして置かれた句。この節句を語順通り直訳すると、「初め／福音の／イエス・キリストの／神の子の」となる。「福音(エウアンゲリオン)」は、福音書では「マルコ」と「マタイ」だけが用いる語であるが、この用例が、一連の福音書を「福音書」と呼ぶようになった理由と考えられる。

・この「福音の初め」とは何を指しているのか、議論がある。「福音」を本書全体で物語られる「主イエスの出来事」として解釈すれば、その一連の出来事の端緒となる「洗礼者ヨハネの出現と主イエスの洗礼」を「初め」として見ると見ることもできそうであるが、そうであれば、「初め(アルケー)」という表現ではなく、「初めに(エン・アルケイ)」という表現がふさわしい。

・そこで、続く「福音(エウアンゲリオン)」の語が本書でどのような意味を与えられるのかということが問題となる。「福音(エウアンゲリオン)」は、「マルコ福音書」中で 7 回(16 章の付加記事を含めれば 8 回)の用例が認められる。日課箇所を除くと、順に、1:14「神の福音を宣べ伝え」、1:15「福音を信じ」、8:35「福音のため」、10:29「福音のため」、13:10「福音があらゆる民に宣べ伝えられ」、14:9「福音が宣べ伝えられる所」、と用いられている。すなわち、「福音」は、「宣べ伝えられ、信じられる」事柄であり、なおかつ、主イエス自身によって「神の福音」として「宣べ伝えられ」た事柄である。整理すると、「マルコ福音書」は、「福音」を「神の」御業として示すのであるが、「福音」を宣べ伝えた者としてのイエス・キリストの出来事自体が(回帰的に)「福音」そのものとなり、それらの「宣べ伝えた者の出来事としての福音」は、さらに「後に従う者」によって「宣べ伝えられ」ることになるが、それもまた新たな「宣べ伝えた者の出来事としての福音」として加えられることになる。この回帰的に増幅する「福音宣教の出来事としての福音」の端緒となったのが「イエス・キリスト」であり、本福音書が描く「イエス・キリストの出来事」は「福音の初め(端緒)」と位置づけられるのである。

・ただし、「マルコ福音書」は、この「福音宣教の出来事としての福音」を、「洗礼者ヨハネ」に結びつけ、さらに彼を「預言者イザヤ」に結びつけることで、実際には、「預言者」に「神の子イエス・キリストの福音の初め」を見ているとも言える。その場合、本福音書が構想している「福音宣教の出来事としての福音」は、起源が預言者に遡るが、その「神の福音」の出来事の中心を「神の子イエス・キリスト」に見ているということになる。

来週の誕生日 (12 月 12 日～18 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-236 番「見張りの人よ」(= I 218 番「夜を守る友よ」)は、19 世紀イギリスの外交官バウリングの作詞。曲は、アメリカの教会音楽家メーソンがこの詞のために作曲。讃美歌 21 では、I 218「世を守る友よ」から全面的に改訳されている。
- ・21-241 番「来たりたまえわれらの主よ」は、211201 資料参照。
- ・21-243 番「闇は深まり」は、20 世紀前半ドイツで活躍した作家・宗教詩人ヨッヘン・クレッパが、ユダヤ人女性と結婚してナチスから迫害を受けていた時期に発表した詩による讃美歌。彼は、家族が強制連行される前夜に家族と共に自死している。曲は、20 世紀を通じてドイツで教会音楽家・音楽教師として活動したペツォルトの作曲。
- ・21-235 番「久しく待ちにし」は、211124 資料参照。

21-236「見張りの人よ」

Watchman, tell us of the night

1. Watchman, tell us of the night, / what its signs of promise are. /
Traveler, o'er yon mountain's height, / see that glory-beaming star.
/ Watchman, does its beauteous ray
aught of joy or hope foretell? / Traveler, yes; it brings the day, /
promised day of Israel.
2. Watchman, tell us of the night; / higher yet that star ascends. /
Traveler, blessedness and light, / peace and truth its course
portends. / Watchman, will its beams alone / gild the spot that
gave them birth? / Traveler, ages are its own; / see, it bursts o'er
all the earth.
3. Watchman, tell us of the night, / for the morning seems to dawn. /
Traveler, darkness takes its flight, / doubt and terror are withdrawn.
/ Watchman, let thy wanderings cease; / hie thee to thy quiet
home. / Traveler, lo! the Prince of Peace, / lo! the Son of God is
come!

21-243「闇は深まり」

Die Nacht ist vorgedrungen

1. Die Nacht ist vorgedrungen, / der Tag ist nicht mehr fern! / So sei
nun Lob gesungen / dem hellen Morgenstern! / Auch wer zur
Nacht geweinet, / der stimme froh mit ein. / Der Morgenstern
bescheinet / auch deine Angst und Pein.
2. Dem alle Engel dienen, / wird nun ein Kind und Knecht. / Gott
selber ist erschienen / zur Sühne für sein Recht. / Wer schuldig
ist auf Erden, / verhüll nicht mehr sein Haupt. / Er soll errettet
werden, / wenn er dem Kinde glaubt.
3. Die Nacht ist schon im Schwinden, / macht euch zum Stalle auf! /
Ihr sollt das Heil dort finden, / das aller Zeiten Lauf / von Anfang
an verkündet, / seit eure Schuld geschah. / Nun hat sich euch
verbündet, / den Gott selbst ausersah.
4. Noch manche Nacht wird fallen / auf Menschenleid und -schuld. /
Doch wandert nun mit allen / der Stern der Gotteshuld. / Beglänzt
von seinem Lichte, / hält euch kein Dunkel mehr, / von Gottes
Angesichte / kam euch die Rettung her.
5. Gott will im Dunkel wohnen / und hat es doch erhellt. / Als wollte
er belohnen, / so richtet er die Welt. / Der sich den Erdkreis baute,
/ der lässt den Sünder nicht. / Wer hier dem Sohn vertraute, /
kommt dort aus dem Gericht.